

# アメリカ原子力学会参加報告

ANS Winter Meeting 2018 (2018/11/10-17, Orlando, FL)

2018/11/22

北海道大学原子炉工学研究室

修士二年 片桐耕司

## 1. 参加準備

ANS(米国原子力学会)へは、6月頃から参加へ向けての準備が始まった。当初は、昨年のRPHAへも参加させていただいていたこともあり、参加はしないつもりであったが、希望者がいなかったこと、またオーランドという有名な観光地での開催という点に後押しされ、参加を決めた。申し込みと同時に Paper の執筆も開始した。英語論文は二回目のため、今回は構成や表現、言い回しなどの点では比較的スムーズに進めることが出来た。一方で肝心の中身、執筆するネタには非常に苦労した。メ切りぎりぎりまで解析を行い、なんとか提出にこぎつけた。最終的に一回の修正を経て無事 accept され、オーランドへの道が拓けた。発表用のスライド資料についても、RPHA の経験により、おおまかな骨組みについては特に問題無く作成することが出来た。しかし、本来入れるべき内容に着手することが出来ず、途中経過のような発表内容となってしまった点については後悔が残る。資料が完成してからの練習期間は約 1 週間であったが、今回は発表態度、発音、アクセントなど中身以外にも意識して取り組んだ。また、イントネーションや英語の言い回しなどは范君と秦君の、ゼミでの発表を参考にさせてもらった。このような感じで万全とは言わないが、そこそこ自信を持ってアメリカへと旅立った。

## 2. アメリカへ

学会へは本研究室の M2 である二平氏と二人での参加となった。学会の開催地、フロリダ州オーランドへは羽田、トロントと二回の乗り継ぎを経て向かった。この機内では強烈な腹痛に襲われた。席は三列の一番窓際で気軽にトイレにも行けず、地獄のような 13 時間だった。トロントでの 3 時間の乗り換え時間でも腹痛は治らず、温かいココアをすすることしか出来なかった。飛行機は



オーランド国際空港では搭乗口とターミナル間を電車で移動する

30分遅れでトロントを出発し、日付が変わった0時半頃、最終目的地のオーランド国際空

港へ到着した。

ホテルまではタクシーで 30 分。チェックインも無事に済み、安堵したことを覚えている。今回のホテルは 1LDK のアパートスタイル。長期利用者をターゲットにしているためか、家族連れが多くみられた。また、ホテルは Old Town という遊園地とショッピングモールを組み合わせたようなテーマパークの一角に位置していた。残念ながら時間の関係上、観光することは出来なかったが、こちらも家族連れでにぎわっていた。



夜の遊園地と二平氏

### 3. ANS Winter meeting 2018

学会は到着翌日の 11 月 12 日から 5 日間の日程で行われた。初日の 12 日は受付とバンケットが行われた。筆者と二平氏は時差ボケと移動疲れから昼過ぎまでだらだらとした後、会場へと向かった。18 時から始まったバンケットは、RPHA の時より規模は大きいものの、思ったより参加者は多くなかった。また周りは知り合い同士で談笑している人が多く、場



バンケット会場の様子

の空気を味わうので精いっぱいだった。中でも北大の先生方(森先生や三輪先生など主に安全研究室の先生方)と知り合いだという何人かからは話しかけて頂き、少しではあるが会話を楽しむことが出来た。バンケットの食事はいかにもアメリカンなピザやでっかい豚のローストなど、お腹を壊している筆者には少々きつかった。

二日目からは、Plenary Session とともに各分野の発表が始まり、各々興味のある発表を聴講

した。Plenary Session では第四世代原子炉の動向についての話が印象に残っている。全ては理解できなかったが、商用小型高速炉の研究なども積極的に行われているようだ。Technical Session については炉物理一般の発表や数値計算手法についてのセッションに主に参加した。数値計算のセッションはアジア系の学生がなぜか多かった印象である。こちらも全ては理解することが出来なかったが、全炉心計算時の計算負荷低減についての発表が目立った。一方で、動特性に関する発表はほとんど見なかった印象である。

筆者の発表は学会 4 日目の午後だった。そこまで不安はなかったものの、やはり直前になると緊張するものである。他の人の発表を見ながら気持ちを落ちつかせた。発表は 4 日目の一番最後(17 時 40 分から)であったのだが、時間が進むにつれてどんどん人が減っていく。結果、発表時には座長含めて 10 人程度しか残っていなかった。「いっぱい人いたら緊張しちゃうな・・・」とか心配していたけれど、流石にこれは寂しかった。発表自体はあまり詰まることもなく、個人的には満足のいく出来であった。練習の成果からか、発表時間も当初より二分ほど短縮したため、補足を入れながら丁寧に説明することが出来た。懸念し

ていた質疑も二件のみ。たどたどしい感じではあったが、なんとか伝えたいことは伝えられたと思う。



ステーキハウスにて  
with 山本先生、名大の学生

発表後には名古屋大学の山本章夫先生にステーキハウスへ連れて行っていただいた。日本にはないサイズのステーキに、日本にはないノリのウェイターに戸惑いながらも、とても美味しく頂いた。また社会勉強という面でもとても貴重な経験となった。山本先生、本当にありがとうございました。

#### 4. 学会以外

オーランドといえばあのディズニーワールドがある街である。筆者と二平氏も学会をサボってディズニー観光を敢行した。本場のディズニーは規模がでかい。そして平日ということもあってか、ほどよく空いていた。二人で一日中パーク内を歩き回り、疲れたがとても楽しい一日となった。余談だが、アメリカのディズニーでは、日本でよく見るミッキーの耳をつけている人はほとんどいなかった。1週間という短い滞在期間ではあったが、日本とは異なる点を多く感じ取ることが出来た。一つは、ありがちな感想ではあるが、サイズ感である。人、食べ物、建造物、車、…、ありとあらゆるものが日本より一回り大きい。物理的なサイズだけでなく、考え方もでかい。NASAの宇宙開発の展示を見る機会があったのだが、あそこら辺の考え方もスケールのでかさを物語っている。加えて、アメリカ人はみな愛国心を持っている。これは善し悪しの話ではなく、そう感じた。

他には、日本車の評価の高さを感じた。アメリカの街中を走っている車の多くは日本車（トヨタのカムリをよく見た）、タクシーの運ちゃんも日本車は大好きだと言っていた。貿易摩擦というのも領ける。一方で、こんな大国に渡り合っていくために努力し、地位を築いてきた先人たちに頭が下がる思いと、製造業を生業として生きていくと決めた筆者の身も引き締まる思いがした。



ディズニーではしゃぐ筆者(撮影:二平)

## 5. 最後に

学生時代の最後の対外発表として参加した本学会であったが、まだまだ至らない点は多々感じた。英語力はもちろんのこと、自分の思っていることを正確に、そして相手に伝わるように表現するというのも、日ごろの鍛錬が必要であると痛感した。残り少ない学生生活であるが、少しでも自身の身となるように、また爪痕を残せるよう努力していきたい。最後に、一週間同行し色々な面で助けてくれた二平氏、期間中お世話になった名大の山本先生と学生の皆さんに感謝いたします。



会場にて (撮影：二平)